

観光資源として変化する海地獄

海地獄は、もともと周囲に壁などのない開けた温泉だったため安全面の問題があり、雨の時は温泉があふれ、近くの作物などに被害を与えることがありました。これらの理由より、海地獄は長い間危険で厄介な温泉だとされてきました。

しかし鉄道技師であった千壽吉彦は、海地獄は資源になると考えていました。20 世紀初頭、千壽は当時としては破格の 12,000 円で土地を購入し、海地獄から地元の旅館の風呂に、温泉を運ぶためのパイプを設置したのです。そして千壽の土地の管理者である宇都宮則綱は、温泉を見にきた人から入場料を取るというアイデアを思いついたのです。そしてこの試みは成功し、海地獄には一日に 100 人近くの観光客が足を運ぶようになったのです。その後、千壽は海地獄の周囲の景観を改善するため、庭園を作ることを提案しました。こうして千壽と宇都宮の 2 人により、海地獄は地元の厄介な場所から観光名所へと変わったのです。

海地獄に影響され、他の人たちも独自の「地獄」の観光地を作るようになり、現在でも鉄輪温泉および別府の魅力となっているたくさんの地獄が生まれたのです。1937 年までにこの地域には 10 の地獄ができました。（そのうちのいくつかは現在ありません。）これらの地獄は観光客を呼びながら、旅館に温泉を供給し、その宿泊者がまた地獄を観光しに訪れるという相乗効果を生み出し、観光地としての鉄輪地域をさらに成長させたのです。

これらの地獄と温泉は、交通の革新も起こしました。人力車の運転手や馬車の運転手は大忙しでしたが、当時それを使い鉄輪とその周辺に行くのにはかなりの時間がかかりました。そのあとさらに血の池地獄へは丸一日かかる旅だったそうです。さらに鉄輪の田舎道は交通量が多いわりに、整備されていませんでした。

1924 年に裕仁殿下（後の昭和天皇）の訪問に合わせて別府の道路が整備された後、別府の観光産業の父とされている油屋熊八（1863 年～1935 年）は、1928 年に亀の井バスを設立しました。そして熊八はそのインフラを利用して、国内初となる女性のバスガイドを乗せた観光バスを運行させたのです。最初に導入された 4 台のバスは、1 日あたり 500 人以上の観光客を各種地獄へと運びました。その後は他のバス事業者も加わり、最盛期には 1 日あたり 1,500 人以上、年間 50 万人以上の観光客を運ぶこととなりました。また、一周一律の価格で乗客が何度でも好きなだけ乗り降り自由というお得な料金設定も熊八の観光バスの成功の一因となりました。この「1 日乗車券」の考えは、現在では全国の観光地で非常に一般的になっています。

こうして海地獄を作った千壽吉彦や油屋熊八をはじめとする事業家たちによって、鉄輪や別府の観光産業は開拓され、数多くの観光スポットのある活気ある温泉リゾートとなりました。そして現在の別府の公共交通機関の基盤となる、効率的な交通網が構築されたのです。